

令和5年度 第4回札幌市文化芸術基本計画検討委員会 議事録

【場所】 札幌市民ホール（カナモトホール）2階 第2会議室

【出席者】 （以下、敬称略）

委員

合同会社ペン具（ペングアート） 代表	ト部 奈穂子
北海道大学 名誉教授	北村 清彦
札幌芸術の森美術館 館長	佐藤 幸宏
札幌芸術・文化フォーラム 副代表	白鳥 健志
北海道大学大学院 文学研究院 教授	谷本 晃久
北海道国際音楽交流会 理事長	長沼 修
市民公募委員	成田 真由美
市民公募委員	丸山 悠輝

事務局

札幌市市民文化局文化部長	柏原 理
札幌市市民文化局文化部文化振興課長	高橋 亮
札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長	柴垣 孝治
札幌市市民文化局文化部文化振興課	工藤 智弘

北村：早速議事を進めて参りたい。前回会議の終了後、委員の皆様から事前にメール等でご意見をいただいていた。主な資料は前回と同じものだが、まずは事務局から本日の説明を願いたい。

柴垣：（資料3について説明。）

北村：前回あまり時間がなくて、ざっと計画素案全体を見ていったが、今回は各ステージの議論を深める約束となっていた。また、事前に意見があれば事務局まで頂くことになっていた。

私が事前意見で、ステージを4つにしようかということをした。第3期計画の4つから3つになると、実際には減っていないにもかかわらず見た目のボリューム感で損をするのではないかと。

ただ、見た目だけでなく内容を見ても、ステージ1はこれまで行っている事業を続けつつ、重点取組事項でバリアフリーや三館体制など、ハード的な部分が課題という気がした。

ステージ2は子どもの問題が大事になるが、もう1つはアーティスト支援。アーティスト支援は他の施策にも分散しているが、第1回会議の時には丸山さんから担い手の育成が話

題に上がり、佐藤さんからもキュレーターなどの担い手の育成といったご議論があった。そういったことを踏まえて、未来のために担い手を育てることを考えてはどうかと思った。具体的に育てるといえるのはどういうことかといえるのはとても難しいが、本日の資料3に記載されたご意見を見ると、コーディネーターやつなぎ手のような人がいるとよいというコメントもある。未来に向かってということで、妥協した表現ではあるが「土壌づくり」という表現、文化芸術を育てる土壌を作るといえることをステージ2に据えたもの。支える人の問題についてもものである。

ステージ3は、今ある、私たちが札幌市で持っている文化財や芸術作品といったものをどう生かしていくかという問題。いわゆる知財の問題。

どうしても、これらステージ1～3を考えると、これまであるものを図では広げていくことになっているが、内側に収縮していく印象だったので、外側に広げたいという思いで新たにステージ4を作らせてもらった。

ずっと議論になっていたのは、文化芸術以外のところとどう連携を深めていくかということが大事という点で、これまでの議論の根底にあったと思う。それを表に出したかったのと、従来の施策2-3・3-2にあったアーティスト支援をステージ4に持ってくる形でボリュームを膨らませたというのが私の意見。

成田さんの意見については、先ほど事務局からの説明では流れをよくするためにステージを組み替えたかどうかというものだったが、もし補足があれば。

成田：実はこの提案で言いたいのは、ステージの再構成がメインではなく、（資料3の成田提案のステージ再構成の）1・2行目にある子供のことが別になっているのが気になっているというもの。自分の中に落とし込むためにどうしたらよいか考えた時に、ステージの組み換えに至った。

鑑賞する人が主体のステージ、アーティストや関係者が主体のステージ、物や文化財のステージというように分けたいというだけ。ただ、すごく良いと思って提案したものではなく、落としどころとしてここしかなかったというもの。施策2-1の子どもに関する部分で、障がいのある子どもや違う言語を話す子どもなどが外れているように感じたので、そこを内容でしっかりと説明できれば、私はそれでよいと思う。

北村：ステージを整理して、子どもの問題を明確にした方がよいということか。

成田：はい。うがった見方かもしれないが、障がいのある子どもとそうでない子をステージで分けているように見えてしまうというところが問題だと思った。

北村：障がいの問題はステージ1に見えるということか。

成田：障害のある人、言語や経済的な状況は年齢にかかわらず施策1-1にまとめ、子どもたちは障がいの有無に関係なく2-2となっていると、。子供だけステージ1と2にまたがるというのが二重になるのですっきりしなかった。

北村：視点を整理していただいたということ。そうすると、私が事務局に提案したのはステージを4つにするという話で、事務局にしてみれば「大手術だ」ということだったが、成田さんのご提案はそういった大きなものではないと。

成田：はい。私は大きな変更をしたいわけではなく小さな部分での問題提起だった。ステージの整理であれば、北村さんの案がとても良いと思った。

北村：では、私の案に、事務局案の方がよいとか、その逆など、何かご意見があれば伺いたい。

白鳥：その前に1点確認したい。前回いただいた「これまでの意見と計画案の対応表」（第3回会議資料3）が今回の資料には入っていないが、どうしたのか。

柴垣：前回までのご意見はお配りした素案に反映していて、新しいものだけお配りした。

白鳥：第3回会議までにはこういう意見があったということ、ホームページに載せたりはしないのか。

柴垣：この場では、既に素案に取り込んでいるため資料としてご用意していないが、ホームページ上にはこれまでの資料はすべて掲載しているので、過去の経緯は市民の方も追えるようになっている。

白鳥：承知した。では北村さんご提案について。北村さんの考えが表に出てくるということがこれまであまりなかったので、少し驚いたが。

感想を申し上げると、見事なのではないかと思っている。こういう切り分けの方が分かりやすいと思う。ステージ4を作ったのは、我々の今までの論議にあった部分を抜き出してくれたので良いのではないかと。アーティスト支援の再掲が以前は3回あったので、一本に絞られたのもよい。

1点申し上げたいのは、（北村委員長の修正案における）ステージ4にある「文化芸術の領域の拡大」という部分。その下の文章を読んでいくと他分野連携を進めるということが書いてあって、それは間違いではないし自分の意見とも合うのだが、この文章で「文化芸術の領域の拡大」というと、一般的に読んだときに他分野連携とは読めないのではないかと考えた。

一般市民に分かりやすいように、「文化芸術の〇〇等の領域拡大」などといったわかりやすい例示の言葉を加えた方が良いのではないかと。これまでも他分野連携はずっと言われてきたので、そういったものをここでも読み込めるように表現があればよいと思った。あとは、やらなければと思っていたアーツカウンシルやアーティスト支援についても細かく例を出していただいているので、文言の使い方などはもう少し議論しながら検討すればよいが、きめ細やかに考えられていて、原則として賛成。

北村：ステージ4のタイトルを考え直したいということ。ほかに何かあるか。

長沼：事前意見を出してはいるのだが、今お話のあった北村さんの案はとても良いと思う。ステージ1～3の書き方はやや漠然としていて、モヤッとしている。ステージ4で初めて具体的な方向性が出てくると思う。

白鳥さんが指摘された領域の拡大について、私も、「文化芸術活動の活性化と領域の拡大」といったような重要な言葉が要ると思う。

その上で、事前に出していなかった部分だが追加させてもらおうと、1つは「多様多彩な文化芸術の展開」という部分が後で出てくると思うが、色々行われている文化芸術活動、市が企画している文化イベントの再評価をしっかりとやるべきだと思う。言葉では、計画の見直しの視点というのが項目としてあるので、そこで議論されればよいのかもしれないが再

評価をしっかりやりながら積み上げていかないとしっかりしたものにならない。

もう1つアーティスト支援について。前回申し上げたが、透明性の確保がどうしても必要。誰がどういう基準で選ぶのか、それを誰が評価するのかということがしっかりやれるシステムが必要。北村さんの意見の中にも評価委員会を作ったらどうかということだったが、ここがとても大切だと思う。それでも、全部を支援することはおそらく無理だと思うので、どういう順番にするのか、何を優先するのか、それははっきり意思が入る部分なのでとても難しい。

3点目は、それらを含めたPR・広報活動について。中間支援団体に数百万円を渡して芸術家支援がおこなわれたとのことだが、これは道新の市内面のトップ記事になっている。そういうバリューのあることを、私は知らなかったのだが、（情報が）出ていたのか。

柴垣：札幌市版にはカラーで掲載された。

長沼：どこにどれだけ支援を行ったかが載ったのか。

柴垣：説明会が行われたことや事業内容など。

長沼：もっと具体的にどこにどれだけお金が出て、どう支援されたかがわかれば、他の団体も関心を持つと思う。抽象的過ぎたのではないかと思う。文化活動はPRが難しいのだが、もっとPRすることが、活動全体を盛り上げる基本的で大事なことだと思うので、もし文言でどこかに入れられれば良いと思う。以上。

北村：ステージ4には原則賛成だが、文言と、前回長く議論した令和4年度の中間支援の件。またこの後で話題に出てくるかもしれない。

あとは、大型イベントの再評価について、資料2の8ページ「将来の文化芸術活動を活性化させるための仕組み」の中の評価検証に、はっきりと「大型イベント」とは記載されていないが、そういう視点は入っているのだと思う。

問題を戻して、各ステージをどう考えるかほかにあればお伺いしたい。

佐藤：ステージの構成について、前提としてお伺いしたいことがある。現時点ではステージが3つで構成されているが、これが変わることで運営の方法が大きく変わるということをおっしゃっていた。計画ができて実際に実施に移していくときに、これに基づいていろいろな個別的な施策が定められ、予算がつけられるという理解でよいか。

柴垣：本計画が基本的な文化芸術の計画なので、これに則って施策を打つ。それから、予算要求において認められるかはまた別だが、大きな考え方としてはおっしゃるとおり。

佐藤：だとすれば、私が思ったのは、北村さんや成田さんのご意見の良し悪しとはまた別のこと。それぞれ、見るとなるほどと思うところがあるが、結局、軸足をどこに置くかでこういった分類は変わってくる。今出ている項目で言えば、アーティスト支援を育成の部分に置くのか、新しくステージ4を作るとしてそこに置くとすれば、他分野との連携や活動の充実にアーティストが関わっていくことを支援することを重視すると理解している。しかし、アーティストもやはり育てなければいけないと思うのだが、1か所に入れ込むことで逆にそこが手薄になるなど、そういうことが起きるのであれば、見た目をわかりやすくすっきりさせることももちろん大事と思うが、漏れてしまう部分がないかが怖いと感じる。

なので、アーティスト支援にせよ子どもたちの機会確保にせよ、何が一番大事でその施策をするのかということ、はっきり考えて、そのステージの中に入れたほうが良いのかなという思いがある。私自身は今回（事前に）意見を出しておらず、こういうステージがよいというところまでは持ち合わせていないのだが、逆に整理しすぎることの危険性を感じた。

北村：今回の私たちは何か決めるのではないので、なるべく皆さんから多く意見を伺って、実際に今後の5年間で何にお金や時間が投じられるかというのはあるが、できる限り多様な意見が出て議論があったということが残ればよいと、個人的には思っている。何かを決めることまではなかなかできないと思っている。

いくつかの問題、子どもの支援やアーティスト支援をどうするかというのはとても重要だが、1つのステージや施策で賄えるかということ、個人的にも難しいと思う。ただ、「こういう方向性とか考え方を、2023年の委員会ではしていた」ということ、「従来の施策も継続するが第4期ではこういうことも考えていた」という議論が深められ、計画書にまとめられたということはどうかと思っているが、いかがか。

柴垣：委員長がおっしゃったとおり、現実的には今までやっていたことがあって、それをゼロにして刷新するわけではない。大きな方向感をここで作っていただき、今までの方向性が少し変わっていくイメージ。なので、何かをどこかに入れたから大きく変わるわけではない。

ただ、北村委員長案のステージ4を見ると、今までの議論の中で特に行っていこうと言っていたものをステージ4に集めたような印象。これからこうしていきたいということ、ある意味特出しした格好だと思う。方向性を強めるようなステージ構成にさせていただく案であると我々は受け取っている。

今までの方向性が少し新しい方向に向かっていくということに資すると思う。

佐藤：こういう文化芸術の施策は成果が出るまで時間がかかるので、5年という単位で、その都度ドラスティックに変えていくことは難しい部分があると思う。

今おっしゃったとおり、これまでやってきたことを検証するというのも5年では難しい。成果はもっと先かもしれない。なので、もう少し長い目で見て、大事なことは継続しつつ、時代や社会は変わっているので、それに合わせて変えていく部分を盛り込むということが基本であれば、私はよいと思う。

北村：他にはいかがか。

丸山：今回、資料3の中で、事前にいただけていなくて本日初めて見た個別ヒアリングの意見があったが、その中で特に印象的なのが10ページにあるご意見。札幌舞踊会・奥山さんがおっしゃっている「方針を立てる事務方と、施設等の現場をつなぐ人がいない」というものと、三部先生も「施設や行政も含めて専門的な人材の存在が必要」というもの。これらがこれまでの委員会でもたびたび出てきた担い手の部分だと理解した。

それを踏まえると、北村さんがご提案されたステージの中で、同じ支援でもアーティストの支援と担い手の支援はやはり少し方向が違っていると認識している。その点、北村さんの案では、ステージ2の施策2では担い手の支援を打ち出し、ステージ4の施策2でアークティス

トを打ち出したという構成だと思う。

そうすると、先ほど事務局がおっしゃった「ステージ4に今後特に注力したい部分が詰まっている」というのとは個人的に少し違う感覚を抱いていて、ステージ2の施策2にある「文化芸術を支える土壌づくり」で、ヒアリングを行った有識者がおっしゃっている担い手の支援という部分がステージ2の核として入っていると感じる。

それを踏まえると、方向が変わるというよりは、アーティスト支援・担い手支援という2つの核が明確になり、それまでふわっと進んでいたものの方向性がクリアになって枝分かれしていくイメージをどちらかというと思った。ここからは個人的な思いだが、佐藤さんがおっしゃった「ステージを広げ過ぎて1つ1つが薄まる」ということではなく、2つどちらも大事ということを、具体的に文章を作っていく上で、意識していただけると今までの委員会の趣旨も反映された文章になると思う。

根子：今までずっとステージが4つあったものを3つにしたという流れがあって、言葉としてまとめることの難しさがあった気がする。今回北村さんの案で4つにしたことで、非常にわかりやすくなった。見え方としてはっきりしたと思う。私としてはこれまでの議論も踏まえつつ、こういった分け方にして担い手の育成や他分野連携といったものが強調できるのであれば、4つのステージにすることはプラスになるのではないかと思う。

北村：ト部さんはいかがか。

ト部：私は土いじりが好きなので、「土壌づくり」という言葉が素敵だと思った。担い手のお話があったが、丸山さんがおっしゃったようにマネジメントの部分がステージ2に入ると理解した。私自身もアール・ブリュットについてマネジメントや提案をしているので、そういったことがここに入るのだとすると、他分野の担い手の育成もここに入るのかなと広い視野で理解できた。素晴らしいと思う。

北村：谷本さんはいかがか。

谷本：わかりやすくなるとよい。佐藤さんがおっしゃったように、分けたことで取りこぼしが起きるとするのは、こういう改変をしていくときに増えるはずが消えてしまうというのがあると思う。先ほど連携の話があったが、そういった今まで入っていた要素をしっかりと組みこんで、さらに分けたことによって相乗効果が出るように、施策が進んでいけばよいと思う。もし今回4つに再整理するときに、今まで行っていたことの取りこぼしがないように整理されるならよいという印象。

北村：他に何かあれば。

成田：ステージ2の施策2の最後（※部分）に、「民間活力の活用など」と書いている。個々の部分について、北村さんが思っているのとは違うかもしれないが、ギャラリー・ライブハウス・劇場など、民間で場所を持っている人との連携・支援・活用が入っているとよいと思った。

あと、ステージ4の文言で気になったのが、資料3の2ページ、北村さんのご意見の2行目以降。「また創造都市さっぽろに相応しい文化芸術の」と記載されているが、「相応しい」という言葉が気になった。誰がどんな基準で相応しいか相応しくないかを決めるの

か、相応しくないと決めたものはどうなるのかというのが気になったので、他の文言があればよいと思う。

北村：まず、ステージ2の施策2の文章が、私の元の案ではこの通りだったか記憶していないが、どうだったか。

柴垣：元々いただいた案では、1ページカッコ書き部分にある「『担い手の育成』（専門家、ボランティア、鑑賞者、マネジメント、ディレクターなど）」という文言が最初に記載されていた。

北村：今、成田さんがおっしゃったような民間のギャラリーなどが一緒になってくれると、私もよいと思う。

それから、「創造都市さっぽろに相応しい」と言う部分については、札幌が創造都市と宣言しているので、その文脈でメディアアートが創造都市さっぽろの看板ということなので、それが頭にあって書いたものだと思う。「こういうアートは札幌には相応しくない」などというものは想定していない。創造都市さっぽろという看板を大事にしたらどうかという意見があったので、そういうことが頭にあったのだろうと思う。

成田：創造都市というのはよい。相応しいか否かという書き方をされると、相応しくないということ誰かが決めてしまうのではないかということが心配になった。

北村：次に進みたい。一通りご意見を伺ったところでは、事務局案と私の案を比較して、私の暗に断固反対という方はいない様子。ただ、例えば白鳥さんや長沼さんがおっしゃったステージのタイトルのつけ方や、切り分けることによって従来行ってきたことの取りこぼしがないような文章の書き方が必要といったご意見があった。

白鳥：文化芸術を中心に考えれば、領域を広げることで、連携の部分も飲み込むという形にはなる。ただ、一般市民が文化芸術の領域とはどういうものかというイメージをなかなか思い浮かべられないと思うので、そうすると普遍的な「連携」や「結びつき」といった言葉の方がわかりやすいのではないかと、というだけの事。

北村：そこも含めて、タイトルを事務局に再考いただきたい。それでは、案自体については原則、ご同意いただいたということでよろしいか。

長沼：意義はない。

(全体合意)

北村：では、大きな方向性はそういうことで議論したい。

それから、資料3「2計画の記載内容へのご意見」について。事前にも何名かの委員からご意見をいただいているが、佐藤さんから追加でご意見があればおっしゃっていただきたい。

佐藤：4ページで白鳥さんが指摘されている、施策2-2の重点取組事項であるアーツカウンシルに関する表記を変えた方がよいというご指摘。私も同じようなことを考えていて、中間支援団体が伴走的なアーティストへの支援を行ったということで、公平性の問題などご意見も出ているが、やはり直接市が支援団体に補助金を出す時の選定の問題だと思う。

ある程度の中立性を持った、アーツカウンシルのような第三者的組織があって、そこが支援団体も含めて、あるいはアーティスト個人に直接でもよいと思うが、選定をする方がよいと思っていた。

なので、アーツカウンシルを設置するかどうかということの必要性及び仕組みと表記されているが、必要性だけではなくて、どういう言葉が良いかすぐには出てこないが、調査・研究などといったことが入っていたら良いと思う。

北村：では、資料3の3ページから見ていきたい。まず、成田さんの「計画の構成について」の部分。「継承・再構築」「見直し」「重点項目」の流れに整理した方がよいというものだが、これは計画本書についてということか。

成田：（資料2の）1ページ目の「2 第4期計画の方向性」と、5ページ「(3)札幌市の文化行政の方向性（文化芸術の価値）」が、同じことについて場所を変えて2回書いているように見えた。そもそも1ページ目の部分についてはこれから肉付けされるのだと思うが、これをそのまま読むと、両者がなぜ分かれているのかと思ったので意見として挙げた。

北村：（資料2は）概要版なので、本書は別にまとめられる。資料2の1ページ目の項目は、第1回会議で「コロナだけではない」「コロナだからこそ」ということを確認して、全5回予定されている委員会あるいは第4期計画全体の考え方をこうしようという、出発点で議論したもの。本書になった時に、「委員たちはこういう考え方で議論を進めました」という頭出しのような部分だと思う。

本論に入っていくと、現状どうなのかとか、第3章では今一度、基本計画のテーマ・考え方が出てくる。繰り返しと言えばそうだが、前書きと本書のようなイメージで分かれているのだと思う。概要版だと2回繰り返されているように見えるが。

成田：肉付けされれば、両方あることの必要性が出てくるのかとは思ったが。

北村：最後、もう一度考え直すこともあるという留保をつけて、ここの文言を決めたということ。「継承・再構築」「見直し」「重点項目」、議論はそうなっていると思うが、章立てとしては第2章に入ってくると思う。

成田：概要版なのでわかりづらかった。

北村：白鳥さん、成田さんがおっしゃっている、資料2の5ページにある集合図（「札幌市の文化行政の方向性（文化芸術の価値）」）についての説明が必要という点。特に私が大事だと思うのは成田さんがおっしゃる点で、文化芸術の本質的価値の部分にある「豊かな人間性の涵養」「生きがい・ライフワーク」「QOLの向上」が、本質的価値なのかと読めてしまうが、恐らくそうではないと思う。成田さんがおっしゃるような「多様な価値観」「創造力・感性」「相互理解」などといったものも含まれなければいけないのだと思う。

白鳥：計画を作る時、（行政は）こういう図を作りたがる。上手く表現できればよいのだが、できない場合はどうするかということ。

この図はこの会議において必要なかどうか。必要ないのならなしでよい。札幌市が計画を作るときに載せればよい。

私はあった方がよいと思っているが、図が外に向かって（価値の拡大を表して）いるというのが重要。外向いているということについて注釈が必要だと思う。どこまで書くかとい

うのは、顕著な例では絵で1ページ、解説1ページくらいの場合もあると思うので、事務局において我々の「必要だ」という意見も踏まえて次の会議までに対応を頂きたい。

北村：前回、成田さんから樹木図のご提案もあったが、この図について追加で何かあるか。

成田：国において（「本質的価値」及び「社会的・経済的価値」の）2つであった価値が3つになぜなったのかという説明も必要であろうし、先ほど北村さんからお話のあったキーワードの検討なども必要であろうし、私はこの図が今のままだとなぜあるのか全くわからない。

少し話が変わってしまうが、5ページと6ページの間につながりがない。せっかく5ページでまちづくり戦略ビジョンの話をして図も見せているのに、6ページ以降にまちづくり戦略ビジョンについて言及がない。この図を使うならそのあたりの説明をもう少しして、各ステージにつながる道筋が見えるようにした方が良いのではないかと思った。個人的にはもう少し概念図みたいな方が好きだけど。

北村：事務局の宿題ということで、吹き出しのところも当然変えなければいけない。3つの価値を最大化するという表現も難しいが。

続いて白鳥さんからアーツカウンシルに関するご意見が出ているが、後でまとめてお話をしたいので、後ほどとさせていただきます。

根子さんからアーティスト・イン・レジデンスを文言として入れるべきというご意見だが、事務局として問題ないのか。

柴垣：この場で即答は難しいが、個別施策にリード文で触れるかどうかについては、他項目との並びも考慮して検討したい。

北村：根子さんから何か触れておきたいことはあるか。

根子：アーティスト・イン・レジデンスについては皆さんが様々な場面でこれまで発言をされており、文化芸術の交流にとって非常に効果の高い事業なので、できれば特出ししてほしいと思い意見した次第。

北村：事務局において検討してみしてほしい。

個人的にはそれに続く「市内のアーティスト」「市外のアーティスト」というのが嫌で、別に世界と地域でもよいのではないかという気もしている。それはよいが。

続いてト部さんのステージ2に関するご意見だが、趣旨のご説明をお願いしたい。

ト部：具体的にもっと増やしたいという思いから、具体的な方法論などが盛り込まれればということで記載した。

北村：重点取組事項の中に具体的に入れるか入れないかは、先ほどのアーティスト・イン・レジデンスの件と同様、事務局に検討いただきたい。

その次に、白鳥さんからステージ3に「まちづくり」の文言を入れてほしいというご意見だが、これは問題ないとのこと。

続いて谷本さんから、これは前回も少しお話いただいた点。“自然史”博物館だと歴史の部分が落ちるという懸念。現行の第3期基本計画を見ると、記述が分裂している。これについては事務局としてどう考えるか。

柏原：博物館の議論は昭和から、元は教育委員会で30年来行っている。「自然史」と打ち出したのは最近だが、元々どういうものを展示していくかという展示の基本計画では「北・その自然と人」という基本テーマで、自然史を標榜している。

また、実際にコレクションポリシーという明確なものはまだないが、「古生物」と「植物」の2つを柱として、これまでも収集を続けている。もちろん、当初は総合博物館という想定もあったが、北海道大学や道の博物館との差別化を図っていくということで、札幌市としては自然にスポットを当てるということになった。

ということで、ここから総合博物館を目指すとなると、過去数十年の検討してきた基本計画を作り直すことになるので、できればこの文章についてはこのままとさせていただきたい。

しかし全く歴史的な評価や展示をしないということではなく、ただ、自然史という見せ方は札幌市がここ30年検討してきたものなので、そこは基本線として残していきたいと思っている。

谷本：そういったお話は何となく伺っていた。自然史というのは地球の歴史、あるいは生物の進化といった古生物の何億年何十億年という地球の歴史。一般的な歴史は、人間の歴史。

自然遺産・文化遺産という区分があるが、自然史は自然遺産。同じく発掘はするが、自然史の場合は化石などが対象となる。土器などは歴史ということで文化遺産ということになる。

恐らく自然史に特化したものであれば、自然遺産に関する博物館が新しくできるということになると思う。

今回の関係団体等からのご意見でも、11ページにある北海道文化財保護協会の小田島氏・田山氏のご意見で、芸術の森のように、歴史に関する市の博物館が必要で、今はばらばらに市の文化財関連施設が市内に散在しているが、それを1つのところで見渡せるように提示できれば教育的にもわかりやすいというもの。私の意見も大体同じこと。

1つだけ例になるかわからないが、北九州市立の「いのちのたび博物館」。そこは、いわゆる自然史博物館だが、中には古文書・考古などの文化遺産を扱っているセクションがある。なので自然史に特化するのも重要だとは思いますが、化石や地質だけで終わってしまうのはあまりにも残念なので、博物館の機能の中に文化遺産、人類の歴史、札幌の歴史の要素が何らかの形で組み込まれて、そこが資料保存等の拠点になるような機能を持つことができれば、小田島氏・田山氏の意見も受け止められる施設になるのではないかと思います。

全く自然史をやめてしまえということではない。なるべく文化遺産・自然遺産双方に配慮して、「札幌の歴史は明治以降だから歴史が浅い」ではなく、長い通史的な人の歴史が当然札幌の市域にあるので、それを大事にして、先住民族の歴史も含めて提示するような博物館施設があれば素晴らしいと思って意見を出した次第。

北村：以前、長沼さんから琴似にある屯田兵屋が放置されているという話があった。谷本さんから、新しい文化材の認定のあり方を検討しているという話もあった。既に文化財認定されているものでなくても、札幌の歴史を知ることができる大事なものはたくさんあると思う。例えばデータベースにしてみてもどうかという話もあるので、箱があってそこに人が

いて、それを専門に扱うキュレーターが札幌の歴史・文化財を取り扱ってくれるのがとても良いと思うが、自然史の中でそれが叶わないならデータベースにアクセスできるとか、色々な工夫はありうると思う。

いつできるかわからないが、自然史博物館のなかでも、データベースみたいなものがあったそれが開かれて活用できるという形になるなら、うずもれた文化財なども少しは救われると思う。

長沼：少々質問をしてよろしいか。少し脇道に逸れるかもしれないが、ずっと札幌市がやってきた自然史博物館構想、これに30年がかかって未だできていないのはなぜなのか。

柏原：検討から30年なので、実際に動き始めてからはそこまで経っていないが。時代とともに見せる内容についても考えが変わっていて、札幌が後発ということもあり、よりよいものをとという考えで検討してきたということがある。

理由の1つは、立てる場所で、当初想定していた場所から変わるということもあった。

また、どうしても単独で建てるとなると100億などの巨額のお金がかかるので、そういうことを他の施策とのバランスの中で勘案した時に、どうしても後回しになってきたというのが正直なところ。

市の経営層も建てたくないのではなく、むしろ建てたいと考えている。観光客の方が札幌を知りたい時に最初に行くのは博物館だと思うので、そういったものがなかなかないというのは札幌にとって損失であると思う。ただ、コロナ禍がありそれが明けた今、他の博物館も一部を除いて集客に苦労している様子。そういった中で、札幌としてもサッポロカイギュウやクジラのほかに、どういう形で人を呼べるかということも併せて考えていかないといけない。以前のように箱だけ作ってそれでよいとは当然ならない。

こうした検討を慎重に行ってきた結果、なかなか建築にたどり着いていないという状況。

長沼：よくわかった。真剣に考えるべきと思う。

北村：文化部の方でかんばっていただきたい。では谷本さんとしてはこういったご説明でよろしいか。

谷本：承知した。意見を述べさせていただいたということで、記録に残していただきたい。

北村：では続いて、根子さんからSDGsに関する記載を入れるべきというご意見だが、事務局としてはいかがか。

柴垣：こちらも検討ができていないので即答は難しいが、次回に向けて検討したい。

根子：中身として、芸術文化の中にサステナビリティの視点をもっと入ってもよいと思って申したもの。現在、海外との比較の中で、常にサステナビリティや環境配慮が問われ続けている。評価システムの中で札幌はどの程度かということも言われ続けている。

芸術祭等のイベントだけでよいかどうかは別だが、一旦こういうところがとっかかりになって、文化芸術においても環境配慮に視点を置いた考え方があってもよいのではないかと思う。

北村：検討してみしてほしい。

それから、私の提案でステージを4つに分けて、それは概ねよいということだったと思う。

そのうちステージ4の施策1で「創造性にあふれる多様多彩な文化芸術の展開」を重点に挙げさせていただいているが、これについて何か異論などはあるか。

(各委員から異論なし)

北村：いろいろな施策になるかどうかは検討しなければいけないと思うが、こういった考え方もあるということ。

それから白鳥さんの基金に関するご意見。第5章に関するものと思うが。

白鳥：私の知識不足であまり書けていないが、民間資金の活用というところをもう少し具体的に書きたいということ。基金についての説明を事務局から事前に受けて、なかなか難しいかとも思ったが、もう少し考え方を示すことができないかと思う。

(ふるさと納税などの)国の施策についても説明を受けたのだが、これについて具体的な明示がないという点もある。ニュアンスがもう少し考えられそうだなと感じたので、上手い語句を見つけたいと思った次第。

北村：限られた予算で、どこから文化芸術の原資を持ってくるかということは、本当はもっと真剣に考えなければならない問題だと思う。公金だけで賄うのは難しい時代になるだろうし、例えば北海道庁でやろうとしているのは文化財修復のためのクラウドファンディング利用。ふるさと納税で基金が潤っているという話もあったが、どこからお金を持ってくるかということは、将来の問題として考えないと、財政は縮小していくかもしれない。そういった観点も考慮して検討してほしい。

続いて、ト部さんからアール・ブリュットに関するご意見。「芸術性の評価」という部分は意図を測りかねるがどういうことか。

ト部：ふわわとしていますが、まず「アール・ブリュット」という用語が良いかどうかという部分もあると思う。最初に「インクルージョンの視点から障がいのある方の芸術を別枠では建てないようにする」というお話で、それはよいと思った。ただ、少数派が埋もれてしまうということが心配になった。

また、国の法律で「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」というものがあって、その中で、障がいのある方が芸術活動に参加するためのハード面の部分と、芸術性の高い作品については盛り上げようということが明記されている。

そういった法律の後ろ盾もある中で、障がいの芸術についての芸術性の評価、「芸術性が高いものとは何か」という話になった時に、一般の現存するアワードなどへ参加するハードルの高さがあるというのが現状。

そういう意味では、その前の段階で(芸術性の)評価をしていって、その次のステップに上がっていくことができればよいと思った。なので、ぜひ皆様のご意見も伺いたく書いた次第。

北村：例えば私がこのご意見を見て考えたのは、佐藤さんが芸術の森でアール・ブリュットのコレクションをすとか。滋賀の美術館はコレクションをしている。なぜアール・ブリュットが話題になったかということ、以前に佐藤さんにもお伺いしたが、まずアール・ブリュッ

ト自体は戦後、ジャン・デュビュッフェという人がブリントホルンの精神分析に関する著作を元にして、作品をコレクションしてアール・ブリュットと名付けたもの。デュビュッフェ自身は自らのコレクションだけがアール・ブリュットであり、それ以外はそう呼ぶなと言ったということではあったが。

芸術性はどうかという点では、芸術史の教科書にも載っている話であって、アール・ブリュットに芸術性があることは認定されていると言える。ただ、現在問題になるのはソーシャル・インクルージョンや障がい者芸術など、芸術の問題であると同時に、障がい者の福祉などの問題でアール・ブリュットが取り上げられる場合が多いのだと思う。

その時に、アール・ブリュットの芸術性を評価するというよりも、最終的に、障がい者が作ったものであれば健常者のものであれば、作品としてどう優れているのかと言う点は個々の評価になるのではないか。優れているなら例えば芸術の森にコレクションすることもできるだろうし、マーケットで流通もするだろうし、いろいろなやり方はあると思う。

なので、（アール・ブリュットの）「芸術性に関する評価」という意図が私には分からなかった。というか、現在のアール・ブリュットが福祉的な面と美術的な面の両方にまたがる、まさに異分野にまたがる活動なので、そういう意味でアール・ブリュットだけではない、障がい者芸術だけではない、LGBTQ や外国籍もそうだし、そういう方も含めて社会全体で、今まで注目されてこなかったものを取り上げていこうという議論であれば理解できる。芸術性の評価というのはどうしたらよいただろうか。

ト部：国の法律において芸術性の高いものをこうせよ、ということが書いてあるので、では評価が高いものとは何か疑問が私にもあり、書いたもの。

北村：佐藤さんにも伺ってみたいが、個々の作品を例えば美術館に寄贈したいのでぜひ受けてくださいという時に、一定の評価をして、受領の可否を判断するものだと思うが。

佐藤：障がい者でも健常者でも、それを問うものではなく個別に評価する。

長沼：作品の評価とは別に、一般になかなか発表の機会がない、展覧会を開く力がないという人が多いのだと思う。いつも思うのは、例えば地下街のメインストリートの一角を完全にそのための展示場にしてはどうかということ。地下街の管理者と調整して広告の何枚か分を市が管理し、そういう人たち専用の展示場にする。場合によっては作品が売れるかもしれない。

同じように地下街の話だが、例えば敷島ビルの地下にスペースがあるが、あのスペースなどとてももったいない。あのようなところを展示場に使うとか、500m美術館も素晴らしいが、なかなかあそこまで行く人がいない。あれも堂々と、駅前通りのコンコースに置くということにすれば、ずいぶん皆頑張るだろう。人の目に触れるということが大切なのではないかと思う。

北村：私もそう思う。アイヌのスペースが地下にできたように、もしできるならとても素敵なことだと思う。

アール・ブリュットにかかわらず、そういう発表の機会がない人に機会を増やす施策を打ってほしいということではどうか。あるいはそういうマネジメントできる人も支援してほしいということか。そんな感じか。

ト部：1点だけ。分野が違う他分野（にまたがる）ということで、先ほど挙げてくださった通りでよいと思うが、本人がそれをやりたいという主張ができない場合も多いので、その場合にサポートする人の意識が高くないとゴミ扱いで、無くなってしまうことも多い。そういう意味でサポートする人の意識も変わってほしいという思いがある。

北村：担い手・つなぎ手という話が多くでているので、そういうところも必要ということだと思う。

それでは最後に成田さんの成果指標に関するご意見。5年後にどう数値が出るかわからないが、現在統計を取っていてわかるものが資料2に挙がっている。ただ、文化芸術は計量化できない部分が多くあるので、どのように評価すればよいか、定性的に評価すればよいか。

この点については佐藤さん、例えば道立近代美術館や市の美術館でも定性的な評価はしていると思うが、どう考えればよいとお考えか。

佐藤：道立近代美術館も評価システムと呼べるかわからないが、そういったものがある。芸術の森の場合は指定管理なので、札幌市芸術文化財団の運営が5年ごとに評価される。美術館だけの個別評価システムはない。道立近代美術館の場合は、北海道だけでなく他府県の美術館でも評価システムを導入しているところが多いので、北海道では特に北大に専門家の先生がいるということで、数値だけでない定性的な評価をしていなければいけないという意識はある。

ただ、そうはいてもなかなか定性的な評価は難しい。やはり来場者は何人か売上げはいくらかなどといったことが、どうしても上に出てきてしまうということは現状としてある。

北村：この場で評価の仕方をどうしろという議論をすることははっきり言ってできない。現在札幌市が持っている統計資料でこういった指標を出せるということだけで、これに代わるような定性的な項目を立てられるかということ、それこそ将来の課題として挙げてもいいくらいの問題。この場で結論は出ないと思うが、成田さん、いかがか。

成田：「5 将来の文化芸術活動を活性化させるための仕組み」の（2）にも書いてあるので、定性的な評価についての検証をする、どのような評価をするとよいか探してみたいなものがどこかにあると思ったのだが。

北村：それは、将来的な課題と言うしかないと思う。

成田：たぶん今はできないと思うので、そこだけ、課題として残してほしい。

北村：長沼さんがおっしゃった大型イベントをどう評価するかという点と合わせて、将来の札幌市の文化施策をどう定性的に評価するか、成果指標を研究・検討するみたいなものがあったとしてもよいのではないかとということ。

成田：もう1点。今のお話に関係して、長沼さんがおっしゃっていた事業評価のことで、全部（事業が）終わってからだけでなく、途中でも評価をして見直しするシステムができないかなと。

北村：中間評価と言うことだと思うが、それも成果指標が決まらないことには、評価しようがない。

長沼：大きな企画ものは毎年つづいているのだから毎年評価してもよい。終わってからというか、終わりが無い。

柴垣：事業の評価をとということか。「中間」の定義は。

成田：（計画期間が）5年間あるので、途中で評価して、施策に反映できるようなシステム。社会が変化すると5年計画が現状とずれることもあると思う。特に前回のコロナのようなことがあった場合。そういう微調整ができる、評議会のような会議体のイメージ。

柴垣：5年計画の中間評価ということ。

北村：それも、成果指標が決まらない限り、どう評価するのかは毎年の数字の推移を見るしかない。5年間の計画で「これをやります」「施策が決まって予算もつきました」「しかし残念ながらこれには予算がつかせませんでした」といった流れがあって、2年3年後に見直すということ。アイデアとしてはとてもよいが、システムを考えるのがとても難しい。

柴垣：コロナの例があったが、現実問題、大前提として、大きな流れは5年くらいでは変わらないだろうということ。ただ、コロナで大きな変化があったのも事実。その時は何をしたかという、本検討委員会とは別の、どちらかというアーティスト中心の有識者会議（札幌文化芸術未来会議）を開いた。それが最終的に文化芸術創造活動支援事業につながったのだが、その時々大きな変化があって必要な時には、柔軟に対応するという事で意見を聞きながら施策を作ってきたところ。

第3期計画ではどうしてもできなかった部分がある。ただその時に、集まって計画の方向性を変えるというよりも、それなりに緊急性の高いことがあれば、施策をどうするかという議論になっていくと思う。

個人的には、佐藤さんもおっしゃったとおり、5年に1回評価するというのも期間としては短いという印象。5年より短いタームで何か大きな出来事があれば、施策ベースで考えるべきで、それ以外のところは大きな流れを前提として5年に1回、時代の変化を踏まえて方向修正していくということかと思っている。

白鳥：そもそも、基本計画と施策・予算はある意味、連動しているが施策・予算として確約されていないものだと思う。この基本計画においてすごく高い水準で謳われるものは、施策として与しやすい。予算が付けやすく、実行されやすいという面は大いにあると思うが……。最終的には、この基本計画と予算執行は別物と考えておかないと、ここで評価が高くなったから予算として潤沢に付くなどということは、多分言えない。誰も決められない。そこが課題だ。

北村：そういう現実があるということ。じゃあこれまでの議論は何かということだが、そうではなく、こういう議論をしたということはしっかり札幌市に受け取ってもらう。

白鳥：例えば他分野連携やアーティスト支援などということはここで散々強く言ってきているが、それは議事録に記載される。それを元に基本計画を行政が作る。そこに上手く網羅されていなければ、我々は「どうなったのか」と言える。

成田：なるほど。

北村：ではよいか。時間が押しているが、残っているのは資料3の4ページ、白鳥さんからのアーツカウンシルに関するご意見。

前回、お話があった中間支援の件で、民間と連携して伴走的視点を行うというのは評価できる。ただそれが、十分周知・広報されていたのか。あるいはお金の面で匙加減での配分を行ってしまうというような、透明性・公平性への疑義といったお話があった。

そしてアーツカウンシルというのも、実は札幌で20年くらい前から話が出ている。アートセンターを作るという話があって、それができたということはアーツカウンシルを作るのかといった議論があって、私としては使い古された感があって、自分の意見で申し訳ないが6ページで「文化芸術活動支援室」を、一種のアーツカウンシルではあるが提案したところ。

前回のご説明では43件の中間支援の応募があって、そこから4団体を選んで500万ずつ配分したという話。逆に言うと、伴走したいという人が少なくとも43者はあるのかと思う。その人たちを、登録制にすると事業の持続性はあるのか、組織はしっかりしているのかなど行政的なチェックが入るだろうが、そういう人たちをバンクのように登録して、そこを通じて作家が「こういうことをやりたいのだが手伝ってくれる人はいないか」という時に人を紹介されて、例えばト部さんという頼りになる人がいるので一緒に企画展をやしましょうと。そういう形。ト部さんが得意な部分とは別に広報が得意とか、財政的な部分が得意とか、そういった部分を詰めて企画を出す。

あるいはそれは少ないと思うので、最初にアーティストと中間支援団体がプロジェクトを持ち掛けて、応募する。それを採択する。そういう仕組みを作れば透明性も確保される。もう1つこれはできるかわからないが、長沼さんが「アーティストが生活できない」という話をおっしゃっていた。そういう事業をやって、それが成果として評価されるなら、公金を充てるというのは、議論があるかもしれないが、成功報酬のような形でアーティストや伴走支援者にインセンティブを払うということもあってよいと思って、仕組みを書いてみた。

こうしてくださいということではなく、こういう考え方もあるというアーツカウンシル的なものを考えてはどうかという提案。

白鳥：アーツカウンシルの定義が何かというのは、二十数年前から札幌では定義づけができなくて、実行できずに流れてきているのだと思う。だからいつの時代も少し不満があったり、逆にやっているではないかという部分があったり。

札幌市は、昨年度から支援事業に、大きくアクセルを踏んだ。これは今までなかったような支援事業であった。私の考え方としては、そういうものも含めたトータル的な文化芸術の推進機構・組織が、アーツカウンシルということだと思う。

いま、この支援事業も含めて、今一度何なのかということ札幌市全体で整理する必要がある。

足りないもの、例えば舞台を作ったし、市民交流プラザなども作った。それと一緒に組み込んだものがアーツカウンシルだと私は思う。必要なのかそうでないかから始めて、仕組みをどうするかという検討をする。その仕組みの中には、支援事業も当然入って

いて、それを今回の第4期基本計画の中で叩きながら、恐らく社会実験を繰り返ししていかなければならない。

例えば前回の会議では、公金を扱う公平性に欠けているのではないかということが言われた。これは社会実験を繰り返して、欠陥を直していくとすることをしなければならないので、1年ではできない話だと私は思っている。

それを基本計画の5年間で順繰りにやっていって、最終的には計画が終わった時に札幌市独自のアーツカウンシルが、全国に自慢できるような形で作ればよいと思う。無論、なかなか簡単にはいかないもので、皆で力を合わせてやっていくしかないと思うが、今、アーツカウンシルのスタートはこの時期なのだと思う。

北村：丸山さんはいかがか。SCARTSの助成金のノウハウを生かしてはどうかと言うご意見をいただいているが。

丸山：資料にも記載されているが、札幌市の「文化芸術振興助成金」をSCARTSで引き継ぐ時、SCARTSを所管する札幌市芸術文化財団が助成事業を新たに始めるに当たって、財団は公益財団法人なので、公益財団を所管する行政庁の内閣府から助成事業の実施について承認をもらう必要があった。助成事業を公益事業として行うに当たって、クリアしなければいけないハードルがある。民間企業と違って、公平性が担保されているか、例えば助成事業を行うということが広く周知されているかどうかといったこと。内閣府が、助成事業を行うに当たってクリアすべき項目が満たされているかをやり取りし、審査してもらった上で、公益法人として助成を行う承認をもらうというプロセスを経ている。

そのあたり、助成事業のノウハウはSCARTSでも蓄積されていると思うので、そのあたりはアーツカウンシルを進めていく上でも参考にできる部分があるのではないかと考えて、書いた次第。

北村：時間がないので、最後に何かあれば。

成田：アーツカウンシルが実は、何なのかよくわかっておらず、勉強を始めたところ。やはり、定義からもっと開かれた場で話し合うことが必要だと思う。これからの5年間で、札幌市にはどういったものが必要かということ、話し合う場が必要だと思う。社会実験というのは実際にやってみるといふことか。

白鳥：法律を超える時、制度を超えるときは、どこでも社会実験とすることをやりながら、ダメなところを直しながら進んでいくというのが社会の常。アーツカウンシルもそれでよいのではないかと。

成田：そうやって5年後にアーツカウンシルができると。名称がアーツカウンシルなのか、北村さんがおっしゃる文化芸術活動支援室なのかはわからないが、そういった組織は欲しいとは思った。

長沼：何となく横文字だからわかりにくいですが、私が所属している北海道国際音楽協会(HIMES)、これは今年35年を迎える。35年前に札幌の音楽家たちが何とかして自分たちの活動を活性化したいと、経済会の人を巻き込んで10名くらいから始まった。現在は300名ほどの会員がおり、事務局員が1名、事務局長・常務理事が1名で常勤。私は理事

長で、非常勤。小さな共同事務所を運営している。まさしく、この事務局員がアーツカウンシルなのではないかと思った。

白鳥：今の（HIMES が扱う）分野に限ってはアーツカウンシルと言えるかもしれない。ただ、他の分野でそうになっていないところがたくさんある。それぞれがやらなければいけないし、札幌市としてトータルを見る部分は必要ということ。長沼さんのところでやっていることが全てだから、他でもできるだろうということではない。

長沼：そういうことではなく、色々な活動をしているので、それを市に全部段取りしてくださいというのは違うのではないか。

白鳥：同感です。市が全部イニシアティブをとって行うことはまずいと思う。市民と行政がタッグを組んでやらなければいけない。よく言う官民連携ということ。

長沼：それを否定するわけではないが、いわゆる市任せではいけないし、芸術の世界だって地べたを這いずり回って、汗をかいてやっていかないといけない。

白鳥：長沼さんがやっているところ（HIMES）は寄付金を集めながら行っている。アーツカウンシルだって寄付金を集めながらやろうということでもよい。ただ、それが良いかどうかということがわからないとい。大きいテーブルの中で皆で議論し決めていくといったことが必要。

長沼：そういうことだとは思いますが、何となく、新しい役割の人が必要だという話で、それがどんなものかよくわからなく聞こえる。

北村：これは個別の意見でも申したが、アーティストをどう支援するかという大テーマだと思う。そのための仕組みを何とか第4期計画期間に少しずつでも実現するような形でやってほしいというのが、この委員会の皆様の総意だと思う。それは汲み取ってほしいということでもよろしいか。

では、本日の話に合わせて資料2が修正されるので、できることとできないことのような部分を事務局にまとめていただき、これまでの我々の議論が反映されているかどうかチェックしていただき、最終的にまとまる。

白鳥：最後に1点、事務局にお聞きしたい。私たちの議論は最終的にどのような形にまとまるのか。本日の資料2の様に記載されるということか。

柴垣：全てが反映されるということではないと思うが、事務局として皆様のご議論を可能な限り反映し、それがベースになって本書につながるイメージ。

白鳥：承知した。

北村：では、5回目の会議に向けて事前に目を通すお時間をいただけるとありがたい。では、これで本日は閉会としたい。

（以上）